

横浜市小児科医会ニュース



No.62 令和3年5月1日

時 言

学校健診における成長曲線の活用による発育の評価

横浜市小児科医会常任幹事 岸 健太郎
(たちばな台クリニック)

今回、成長曲線の活用による学校健診における身体計測の評価について、紹介しつつ私見を交えつつ書いてみたいと思います。よろしくお願いいたします。

2019年のこの横浜市小児科医会ニュースの「最近の話題」で横浜市大学附属市民総合医療センターの志賀健太郎先生が触れていただいた話題ですが、いよいよ横浜市でも実施に向け実際に学校のデータを用いる段階まで至ったということを耳に入れ、待っていました！と居ても立っても居られなくなり話題にしてしまいました。健診において身体計測は測定時のみではなく継続的に評価することが大切であることは言うまでもありません。小児科医にとって馴染みの深い成長曲線による判定は大賛成です。先日も思春期早発症に気づかれず、背が止まってから来院した低身長の子を経験しました。この新しい評価によりコロナ禍であっても逃してはいけない身長、体格、思春期に関する異常、肥満、生活習慣病、摂食障害など、まさに小児科の守備範囲という問題にとどまらず、多岐にわたる診療科が扱う疾病を早期発見、対応できることが期待できます。

平成26年の「学校保健安全法施行規則の一部改正」の中で「児童生徒等の発育を評価する上で、身長曲線・体重曲線等を積極的に活用することが重要となる」と明記され、平成28年から施行されました。日本学校保健会より出されている「子供の健康管理プログラム」¹⁾を用い成長曲線の作成と共に次の9項目の対象者をExcelで自動抽出できるようになっています。

- ①高身長（97パーセンタイル以上）
- ②身長増加過多（1Zスコア以上の変化）
- ③低身長（3パーセンタイル以下）
- ④身長増加不良（1Zスコア以上の変化）
- ⑤極端な低身長（-2.5Zスコア以下）
- ⑥肥満（肥満度20%以上）
- ⑦肥満度の増加過多（過去の最小値より20%以上大きい）
- ⑧やせ（肥満度-20%以下）
- ⑨肥満度の減少過多（過去の最大値に比べ20%以上少ない）

大変素晴らしいシステムです。しかし、この条件のみで抽出すると莫大な数の対象者になって

しまします。また、すべてが受診勧奨対象にはなりません。例えば、抽出項目①や③の条件を満たしても程度が強くなく成長曲線に沿った成長であれば、ただ大きめ、小さめの子であり異常である可能性は少ないと思われ、その項目単独では受診勧奨するほどではありません。この①に②の条件が若い年齢で加われば思春期早発症の可能性があります受診勧奨が必要となると考えられます。また、「児童生徒等の身長と体重の成長が正常であれば、成長曲線基準図の中の基準線に沿った成長をする。児童生徒等の成長が異常であれば、この基準線に対して上向き、あるいは下向きの成長を示す。」¹⁾とありますが、これは思春期前に当てはまりますが、思春期においてはその限りではありません²⁾。思春期発来には個人差があり、この時期の身長SDの低下や増加がすなわち異常にならないことがあるということです。よって②、④も慎重な判定が必要となります。と、抽出基準一つでも有効利用には一工夫必要です。より良く進めていくためには、人口の違い、抽出基準の精度、Excelを用いた方法のため学校でのパソコンの環境や入力の問題、時間と手間、費用など様々な問題をクリアする必要があります。それぞれの市に合った方法が必要となるということです。

既に行われている例を見てみますと、人口約5万人の市³⁾では上記項目から②、④、⑤、⑥（の内、肥満度50%以上）、⑦、⑧（の内、肥満度-30%以下）、⑨と一部改編し条件を絞り抽出したものを学校医が判断します。学校医が判断に迷うケースに限定して医師会設立の専門委員会で受診勧奨を判断しています。一方で人口約50万人の市⁴⁾では②、④、⑤、⑦、⑨のみ抽出しています。その内の⑦、⑨は同市で行っている生活習慣予防健診に組み込まれ対応されます。②、④、⑤の成長曲線を小児内分泌専門医が判定し受診勧奨します。ちなみに、抽出者は小学生が2.5%600人で、中学生に至っては13%（！）の1600人もが抽出されています。また、80万人の市⁵⁾では「子供の健康プログラム」に独自の抽出基準を追加することで、「受診勧奨」と「注意喚起したうえで経過観察」を自動的に判定しています。具体的には、②（の内、男児小5／女児小3以下）、④（の内、小学生および思春期末完了の中学生）、⑤、⑥（の内、肥満度50%以上）、⑦（の内、かつ肥満度20%以上）、⑨（の内、かつ直近2年間で肥満度-15%減少）を受診勧奨条件とし、生活習慣病健診も利用されています。これらから伺えるのは専門医や委員会の早い段階の介入は、受診勧奨の精度が高くなり学校間の格差がなくなるメリットがある一方で、より多くの手間、時間、費用が必要になります。また、抽出基準をより詳細にすると、適切な抽出率を上げる基準の模索が必要となりますが、専門的な介入は減らせます。先生方の創意工夫を伺い知ることが出来て大変勉強になりました。

児童生徒数が1学年ごとに約3万人以上いる人口約380万人（令和2年9月横浜市ホームページより）の横浜市はどう行うのでしょうか。現在、横浜市は教育委員会と学校医部会の先生方が横浜市に合った他の市に勝るとも劣らない素晴らしい方策を進めていただきます。完成した抽出基準を楽しみにしたいと思います。

以上、長文かつ駄文になりましたが、子どもの変化をより早く、よりの確に発見し、健やかな発育につながることを願ひまして、このつぶやきを終えたいと思います。

謝辞 横浜市小児科医会会長の相原雄幸先生よりこの記事を執筆するにあたり横浜市の現状を丁寧にお教えいただきました。改めて感謝いたします。

- 1) 文部科学省スポーツ・青少年局学校健康教育課（監修）. 児童生徒等の健康診断マニュアル平成27年度改訂. 日本学校保健会；東京：2015.
- 2) 井ノ口美香子, 長谷川奉延. 成長曲線を正しく使おう— 身長・体重・頭囲・座高・腹囲・伸展陰茎長・精巣容積・BMI. 小児科診療 2012；75：353-361.
- 3) 学校健診での成長曲線の活用 (kamiina-isikai.or.jp)
- 4) 平成30年日本学校保健会の資料より
- 5) 保健給食課関連 新潟市 (niigata.lg.jp) の9

最近の話題

(17)

横浜市小児科医会常任幹事

松岡 誠 治

(松岡医院)

最近の話題と言えば、コロナしかありません。小児の感染、重症化は少なく、直接的に感染の恐怖を感じることはないものの、みなさんそれぞれの立場で苦労して奮闘努力されていると思います。大人は専門ではないから関係ないなんて言っている場合ではありません。経験したことのない脅威に対して各人が考えて新しいことをやってみて、情報、意見交換をしたいところです。顔を合わせる機会がなくなり、本音で好き勝手なトークができないのが残念です。

当院では子どもの患者さんはほとんど来なくなってしまう、発熱等診療予約センターから紹介される成人の患者さんを受け入れて経営が成り立っています。毎月の収入を集計していますが、ぎりぎりです。持続化給付金の対象にはななくてがっかりです。それぞれの立場、環境、考えで対応も様々でしょう。流行が長引くため、感染対策事業への参加、助成金の申請をしようと考えた先生もいるかとは思いますが、途中からの参入は難しそうです。コロナ診療を実施されていない先生のために、自分の経験を紹介させていただきます。

【SARS流行時の経験】

昨年1月まだ国内ではコロナは問題になっていませんでしたが、地域保健事業部会で「疑似症患者への休日急患診療所での対応方法」についてまとめてくれるよう要望しました。2003年SARS流行時には私は横浜市民病院に毎月1-2回夜間・休日の当直の手伝いをしていましたが、市民病院がSARS対応の拠点

病院になっていました。幸い国内では流行しませんでした。自院以外での外来対応についてはマニュアルが必要と感じました。

また、青葉区で地域保健事業部を担当していたのでN95マスクの着用方法の研修会を開き、3M社から共同購入を手配しました。N95マスクは当時は珍しく、既に「世界の工場」と呼ばれていた中国で今回同様感染流行が始まったためこの時もマスク入手が困難になっていました。

【新型インフルエンザ流行時の経験】

2009年に新型インフルエンザが流行した時には、横浜市から医師会を通じて発熱外来の意向調査に回答したところ30分もしないうちに「福祉保健センターから紹介された」と患者さんが来たのには驚きました。正式な契約、紹介の予告もありません。今回のコロナでは契約の文書を読んで手続きをするのが面倒でしたが、仕方がないと思います。

感染対策工事に半額の補助金が出るということで、隔離室と専用玄関を作りましたが、「神奈川県は病院だけが対象」と言われ支給されませんでした。今回は気前よく補助金を出してくれますが、収束の見込みがたず事業継続にお困りの先生もいるかと思っています。

【東日本大震災でのボランティアの経験】

民間ボランティア団体に参加して2011年から14年にかけて宮城県気仙沼市へ5回ほど訪問しました。個人と接することが大切、やってみなければわからない、経験が自分の役に立つことを学び、警察、消防と同様に、社会インフラとしての医療の重要性を認識しました。

【ダイヤモンドプリンセス号】

昨年2月に横浜市医師会を通じて、ダイヤモンドプリンセス号へのJMAT派遣の募集があった時には応募する気でいました。2014年に父と2人で大槓橋からのクルーズで11日間を過ごしたので、この船については誰よりも知っていたからです。けれども、93歳の老父と同居しているため家族に反対され、感染症の専門家ではないDMATが指揮することに不安があったので、見合わせました。後に岩

田健太郎先生のレポートを読んで、この判断で良かったと感じました。

自分の安全を確保した上での診療をするということは、横浜マラソンにドクターランナーとして参加するためのBLSのコースで学びました。この研修を受講していなければ自分や家族のリスクなんて考えなかったと思います。homeではなくawayでの業務を引き受ける場合、自分で現場対応が決められないので安全が担保されているか否かを判断する必要があります。

【PCR検査センター】

医師会運営のPCR検査センターは、一般診療所の検査体制が整うまで2-3か月の臨時施設と聞いていたので、自院での検査設備、検体の取り扱い、システム構築の参考にさせてもらうため、昨年5月、6月に出動しました。コロナの2類感染症相当扱いが続き、変異株が現れたせいもあり、広く診療所で検査をするようにはならず存続しています。ワクチン接種が始まれば診察、検査をする内科診療所も増えるのでしょうか。

【発熱等診療予約センター】

昨春の発熱等相談センターは、PCR検査、病院への防波堤のような存在でした。患者さんの話を聞いて、電話だけで判断して「病院受診、PCR検査の対象にならないことを説明する」という役割です。患者さんは誰もが不安で診察を受けたいと思っているのだからなかなか納得してくれない、そのため話が長くなるから別の人が電話をかけても話し中のことが多い、いつも話し中だから電話をするのを諦める、と評判は散々でした。

発熱等診療予約センターになって、我々が診療対応するのでセンターの担当者は患者さんから情報を聞いて近くの診療所に紹介するだけという役割になりました。来院した患者さんは皆が検査を希望するのかなと思っていましたが、そうでもありませんでした。当院では全年齢を受け入れましたが、9割以上が成人患者できちんと説明をするとそれだけで安心して、必要もないのにPCR検査を強く求められるようなことはありません。話をして、

診察をすると安心してくれます。寄り添い、傾聴が大切だと感じました。

当院では、感染リスクはありますが検査結果は来院してもらって報告しています。間違いを防ぐ、個人情報に配慮する、再診で状態の変化を診察する、検査結果報告書を手渡すということで、より安心してもらえるように思います。患者さんからもいろいろ情報を教えてもらえます。

【濃厚接触者検査】

無症状感染者が少なくないことを考えると、濃厚接触者は発熱患者よりも感染リスクが高いでしょう。年末に小さな保育園の接触者検診を依頼されました。福祉保健センターから依頼があったので、「唾液で検査できる人だけ。園の担当者に直接連絡してもらい、前もってリストを送ってから来てね」と伝えました。しかし連絡もなく、次から次へ来て、車は駐車場に入りきれず道路に溢れました。誰かが助けてくれるわけではないので、とにかく自分でこなさなければダメ。1歳から3歳までの園児で、唾液を採取できたのは最初の3歳児ただ一人で、後はグチャグチャ。homeのはずがaway状態。幸い15名の中に一人もPCR陽性者がいなかったのも、私も来院した園児や保護者も濃厚接触者にはなりません。検体の取り扱い違い、汚染にも注意を払いました。間に他人が入るとダメですね。当事者同士できちんと話をしないとダメです。急に決まる「濃厚接触者の集団検診」はハードルが高過ぎるので、専用の設備とノウハウを準備していないのであれば手を出さない方が良いでしょう。

【年末年始の診療】

年末年始の医療提供体制確保協力事業にも応募して、12月29日、30日と元日、1月2日、3日に診療をしました。発熱等診療予約センターからも電話が来て、数人の来院でしたが、受診者は安心して喜んでくれ「医療は社会インフラである」ということをあらためて実感しました。

【厚生労働省からの感染防護資材について】

発熱診療を行うと厚労省から感染防護資材が提供されます。マスクはありがたいのですが、フェイスガードは使いにくく、ガウンの紐は短くて前で結べず、手袋はサイズを選べずSサイズばかり届いて私の手は入りません。扱いやすいものが欲しいのですが、無償でもらっているので贅沢は言えないのでしょうか。

感染防御については、自分の考えでしっかり対策をしていますが、同時に行政に評価される場合を考えて濃厚接触と判断されて休診を余儀なくされることのないように配慮しています。それでも休診にしなければならないような場合のために、日本医師会の休業補償に加入しました。生きていること、生活できることのありがたさを感じながらこんなふうに毎日を過ごしています。1月31日に自分のコロナ抗体検査をしましたが陰性で、とりあえず感染防護は十分だったと感じるとともに、不顕性感染で免疫獲得はしていなかったんだと少し残念に思いました。



新型コロナウイルス感染症 ～診療・教育・研究の視点から～

横浜市立大学大学院医学研究科 発生成育小児医療学

西 村 謙 一 先生

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）がはじめて日本で発生してから、およそ1年が経った。日本の医療は2020年4月の第1波、7～8月の第2波、そして11月～2021年2月の第3波を何とか乗り越えた。しかし、その波高は次第に高さを増すのみならず、第3波以降は2020年11月並みの患者数で推移し¹⁾、本稿執筆時点の3月末には第4波の到来が懸念されている。

神奈川県小児医療体制構築からも1年が経とうとしている。本稿では、横浜市の小児COVID-19対策チームの活動報告（診療）に加えて、withコロナ時代の病院実習（教育）と筆者が事務局を務める横浜市立大学の小児COVID-19関連研究についても述べたい。

2. 横浜市小児COVID-19対策チームの活動報告

小児医療体制の構築については2020年11月発行の横浜市小児科医会ニュースNo.61に掲載していただいた。対策チームの構成メンバーは横浜市医療局・こども青少年局(行政)、横浜市医師会（診療所）、小児コロナ受入機関（病院）のメンバーである。オンライン会議を月に1回行ない、横浜市内感染者状況、各病院の小児COVID-19病床状況と診療体制、入院患者数および転送患者数の報告と、事例の共有をし、問題点について対策等を議論している。

小児COVID-19の特徴は感染者数が少なく、無症状または軽症者が多くを占めることである。国内の20歳未満COVID-19患者数は2021年3月24日時点で43,290人（全体の9.5%）であり（図1）¹⁾、各国の報告同様、感染者数は少ない。また、横浜市のオープンデータ

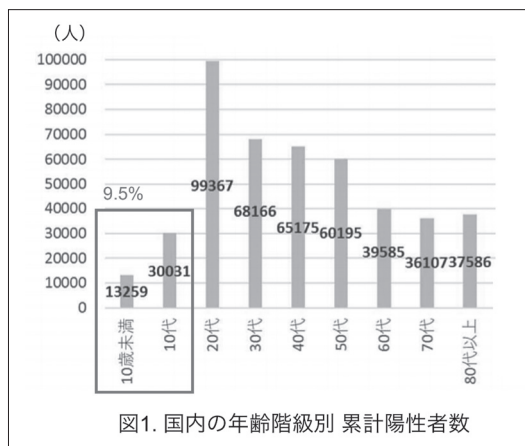


図1. 国内の年齢階級別 累計陽性者数

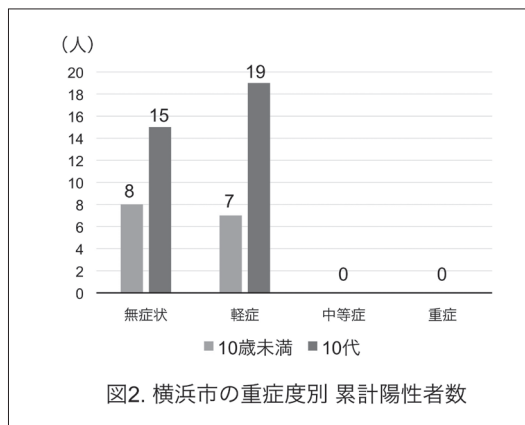
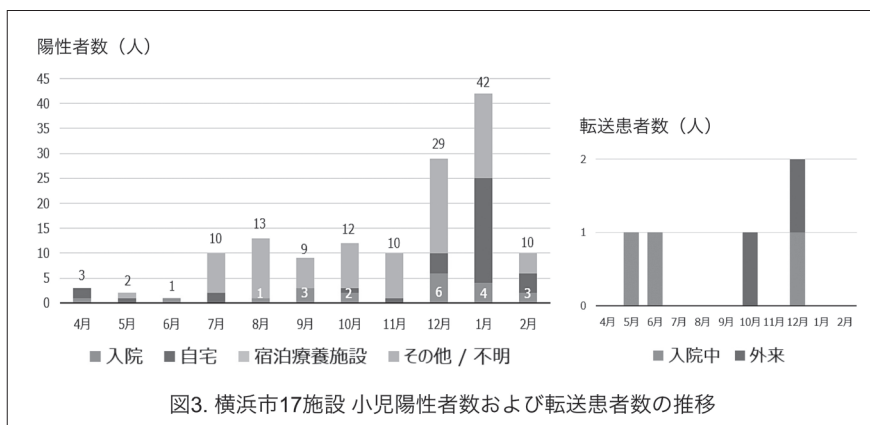


図2. 横浜市の重症度別 累計陽性者数

によると中等症以上の小児患者は発生していない（図2）²⁾。

そのため幸いにも、入院病床の調整困難や転送時のトラブルは起こっていない。横浜市17施設における小児陽性者数は第3波に相当する2020年12月、2021年1月に急激に増加したが、2月には第3波前の水準まで減少した。陽性者数の転帰の内訳はほとんどが自宅または不明（≡自宅と推測される）であり、入院患者数は少ない（図3）。

一方、陽性者数、入院患者数が少ないからこそ、事例の共有は重要である。COVID-19



病床を持たない病院や診療所にも、COVID-19患者は来院する可能性がある。少ないからこそ1例1例を大切にし、診断の経緯、感染対策、転送手順等の詳細を共有しているのがある。

横浜市医療局・こども青少年局が参加していることで、問題点をリアルタイムに共有し、医療施設の声をダイレクトに行政へ伝えることができる。例えば、PCR陰性の濃厚接触者（後に2回目の検査で陽性）を見守り相談所職員が一般車両で搬送した際に、感染対策が不十分であった。今後の対応を皆で確認し、こども青少年局から各児童相談所へ共有していただいた。また、保育園や学校でのCOVID-19発生情報が少しずつ医療者に共有されるようになったことには、本会議で声を上げ続けたことが一役買っているかもしれない。

ワクチン接種が広く行われることでCOVID-19が収束に向かい、対策チームの活動を減らしていけることを願っている。

3. Withコロナ時代の病院実習

緊急事態宣言が2020年4月に発出されるとともに、学生は登校禁止となった。講義が中心の学年はWeb会議システムの導入により、beforeコロナ時代とほぼ変わらない教育を受けることができた。しかし、実習が中心の学年にとって登校禁止は学びの中断を意味し、学務課や教員らは頭を抱えた。

当科ははじめに、動画コンテンツ³⁾を観ながら回答を埋める形式の課題を作成した。

本来は実際の患者さんを視たり聴いたり触ったりするはずだった学生にとって、何かについて成書で調べる従来の形式よりは、診療をイメージできると思ったからである。

6月からは、オンラインでのクルズを開始した。クルズも課題と同様に、診療を疑似体験できるかどうか重点を置いた。ある疾患について教員が一方に講義する形式ではなく、症例をベースに議論をするクルズとした。ある主訴で来院した患者に何を問診し、どんな身体診察をするか議論し、次に鑑別疾患とその根拠を指導医にプレゼンテーションをする。最後に臨床推論に基づいて教員が振り返りをする。行っていることはまさに臨床実習後OSCE⁴⁾である。「実践的な練習ができた。」「発表があるので緊張感をもって臨めた。」「アウトプットすることで理解が深まった。」等、学生から好評であった。また、課題とのつながりも意識した。例えば、川崎病の事前課題を行った翌日に、発熱を主訴に来院した溶連菌感染症や川崎病の症例のクルズを行うのである。「予習をしてから臨むので理解が深まった。」と狙い通りの結果が得られた。

7月からはついに病院実習が再開した。週に2回の制限付きであったため、登院日には様々なイベント（心臓カテーテル検査、1か月健診、症例検討カンファレンス等）を経験できるようにした。非登院日は今まで行っていた課題とクルズを継続した。11月からは週3回の登院が可能となり、さらに2021年4

月からは日数制限がなくなる予定となっている。当科は今後も自宅学習日を設けるつもりである。当初はやむを得ず始めたオンライン実習であったが、自宅で集中して学習したことを、登校日に最大限の学びに発展させることができる、オンライン/対面ハイブリッド実習の新たな可能性が見えてきたからである。

4. 小児COVID-19関連研究

横浜市立大学は日本医療研究開発機構 (AMED) 事業の支援を受けたCOVID-19関連の研究を4つ走らせている。そのうちのひとつが『小児新型コロナウイルス感染症患者における抗体獲得および保持についての前向き観察研究』である⁵⁾。2020年8月、臨床統計学と微生物学のグループが行っていた成人研究の事務局に慈恵医科大学小児科から問い合わせがあり、当科と共同研究を行なうことになった。

本研究は小児COVID-19患者を対象として、診断から3か月、6か月、1年後にSARS-CoV-2およびヒトコロナウイルス6種の抗体検査と中和活性測定を行い、小児における抗体の獲得や保持の実態、抗体価測定の意義を明らかにするものである。

当初の目標症例数は50例だったが、協力機関の追加やAMED支援の延長を受け、現在は100例を目標に登録を進めている。本研究によって抗体価測定が免疫パスポートとしての意義をもつかどうか明らかにし、さらには小児COVID-19の病態解明の一助となるよう、良いデータを集め、良い形で成果報告をしたい。

5. おわりに

診療・教育・研究、それぞれの視点からCOVID-19について述べた。世界中の誰もが経験したことがないことが起こり続けている日々だが、大学病院の立場からCOVID-19に関われることを喜びととらえ、この日々を乗りこなしていきたい。

参考資料

- 1) 厚生労働省. 新型コロナウイルス感染症の国内発生動向.
<https://www.mhlw.go.jp/stf/covid-19/kokunainohasseijoukyou.html> (参照2021-03-28).
- 2) 横浜市. 横浜市内の陽性患者の発生状況データ・相談件数. <https://www.city.yokohama.lg.jp/city-info/koho-kocho/koho/topics/corona-data.html> (参照2021-03-15).
- 3) OPENPediatrics. <https://www.youtube.com/channel/UCyQ4ieAnEwDQs9iZLwH9H8w> (参照2021-03-29).
- 4) 公益社団法人 医療系大学間共用試験実施評価機構. 共用試験OSCE資料.
<http://www.cato.umin.jp/osce.html> (参照2021-03-29).
- 5) 横浜市立大学. 小児のCOVID-19患者における抗体獲得および保持についての調査研究を開始. <https://www.yokohama-cu.ac.jp/news/2020/201118yamanaka.html> (参照2021-03-29)



病院紹介

社会福祉法人 恩賜財団 済生会支部神奈川県済生会

横浜市東部病院

〒230-8765 横浜市鶴見区下末吉三丁目 6 番 1 号

Tel 045-576-3000

Fax 045-576-3525

<http://www.tobu.saiseikai.or.jp/>

病床：562床 うち、重症心身障害児（者）施設サルビア44床

救命救急センター病棟24床、ICU10床、HCU 6 床、NICU6床、GCU10床、SCU 6 床など

診療科目：25科

内科、循環器科、消化器科、消化器外科、神経内科、小児科、外科、整形外科、形成外科、
脳神経外科、呼吸器科、呼吸器外科、心臓血管外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、
耳鼻いんこう科、リハビリテーション科、精神科、放射線科、麻酔科、歯科口腔外科、救急科、
病理診断科

医療職職員：（2020年 4 月 1 日時点）

医師	326名	常勤	264名
		非常勤	62名
初期研修医	26名		
看護師	766名	常勤	726名
		非常勤	41名
助産師	41名	常勤	36名
		非常勤	5名
薬剤師	51名	常勤	49名
		非常勤	2名

実績：（2019年度）

1 日平均入院患者数	478.8名
平均在院日数	8.9日
1 日平均外来患者数	1129.9名
救急車搬送患者数	6,331台
地域医療支援病院 紹介率	76.5%
地域医療支援病院 逆紹介率	122.3%

当院は平成19年 3 月30日に横浜市の東部地域中核病院として開院し、救命救急センター・集中治療センターなどを中心とした急性期医療および種々の高度専門医療を提供すべく取り組んでまいりました。

病院理念は「私たちは、医療を通じて生命（いのち）を守ります」です。1. 安心して受けられ、2. 患者さんに優しく、3. 常に一歩先の、4. 地域社会に貢献する医療をめざしています。

急性期病院でありながら、横浜市の政策的医療の一環としてハード救急も担う精神科や重症心身障害児（者）施設も併設しており、また、生活保護受給者などを対象とした「無料低額診療事業」も行っています。

今後も、皆様から信頼される病院をめざして、職員一同努力していく所存です。

当院の特徴は、以下の通りです。

1. 幅広い専門診療科：

25科の専門診療科をもち、地域の皆様の多様な医療ニーズに応えています。診療には疾患別センター制を導入し、一人の患者さんの治療計画を立てるにあたり内科系と外科系の医師が常に連携して、最善の治療法を施行しております。専門医による専門外来も多数設置しております。

2. 患者さんの視点に立ったチーム医療：

患者さんご自身、ご家族にも参加していただきながら、あらゆる職種の職員が連携し、患者さんの治療やケアにあたっております。

3. 充実した救急医療：

当院は横浜市内に9つある救命救急センターの一つで、鶴見区では唯一の指定病院です。当地における最後の砦としての使命を果たすべく、24時間365日救急専門医を中心に内科や各専門家とともに診療科の枠を超えて救急医療を提供しています。小児救急拠点病院、横浜市重症外傷センターの指定も受けており、幅広い疾患を診ております。三次救急を担うため、地域の医療機関と連携し、救急治療後の転院がスムーズにおこなえる体制も整えています。

4. 顔の見える地域医療連携：

地域医療支援病院に指定されており、地域の先生方には、当院の連携登録医療機関・登録医として多くのご支援をいただいております。医療需要の増加に対応できる体制を当地に構築し、その牽引役となるべく、周辺の医療機関と「顔の見える」緊密な関係を築いています。

5. 専門性のある看護師の活躍：

診療特定看護師2名、領域特定看護師14名、専門看護師10名、認定看護師31名、認定看護管理者3名、アドバンス助産師15名、日本精神科看護技術協会認定精神科認定看護師2名が在籍し、各方面で活躍しています。また、国内唯一の小児プライマリケア認定看護師教育機関として2021年4月より開講を予定しております。

6. 小児・周産期医療の充実：

神奈川県周産期母子医療センターとして年間1,000件を超える分娩があり、低出生体重児管理においても新生児科と連携しています。小児病床はNICU6床、GCU10床、緊急入院用ベッドを含めた48床で構成しており、患者さんと養育されている方たちを支えるために、チャイルドライフスペシャリスト、保育士も診療に参加しています。全国的にも極めて少ない肝臓・消化器を専門とする小児肝臓消化器科を持ち、小児の疾患に関するほぼすべての領域に対応しています。また、整形外科の専門医による乳児の股関節脱臼の検診もしています。

（文責：乾 あやの）

横浜市小児科医会会長

相 原 雄 幸

総会開催ならびに講演会再開のご連絡

2020年春と秋の医会ニュースでご報告させて頂き皆様もご承知のように、新型コロナウイルスのパンデミックによる影響のために2020年度の横浜市小児科医会の総会は書面開催とし、講演会はすべて中止とさせて頂きました。現状は、第3波は完全に収束したとはいえない状況であり、変異株による第4波も懸念されています。しかしながら、3月からはワクチン接種も始まり、医療関係者については6月頃までにはおそらく接種が終了できるものと想定されています。

上記の状況も考慮しつつ、他の医会の活動状況も参考とさせて頂き、当医会としてはコロナ以前と同様な対面による総会ならびに講演会開催は未だ時期尚早と考えており、ハイブリッド（対面と遠隔）による開催を行うこととしました。順次、講演会などを企画し開催致します。会員の先生方のご理解と御協力をお願い致します。

まずは、5月13日（木）に定例総会と講演会の開催を予定しております。多くの先生方の参加をお待ちしております。また、6月11日（金）に産小研の講演会をこちらはWebのみで産婦人科医会が当番で開催致します。

1. 報告

1) 第3回常任幹事会 2020年12月2日

横浜ベイシェラトン 出席者9名

1. 各種部会等報告について

小泉常任幹事より、第2回先天性代謝異常対策委員会の報告として拡大新生児マススクリーニング検査についての資料提供があった。

2. 令和2年度市長表彰（母子保健）候補者の推薦について

相原 雄幸 会長を推薦した旨の報告。

3. 令和2年度横浜市医師会学術功労者表彰候補者の推薦について

小泉友喜彦常任幹事を推薦した旨の報告。

4. 令和3年度における各種表彰への推薦について

- ①横浜文化賞 ②母子保健奨励賞 ③朝日がん大賞および日本対がん協会賞
- ④医療功労賞 ⑤保健文化賞 ⑥毎日社会福祉顕彰⑦日本医師会最高優功賞
- ⑧日本医師会赤ひげ大賞→4月頃推薦
- ⑨神奈川県医師会学術功労者表彰→5月頃推薦

⑩横浜市医師会学術功労者表彰

→10月頃推薦

来年度予定している表彰は上記のとおり。推薦者の候補を連絡いただく。

5. 令和3年度各科医会助成金交付に伴う会員数の調査について

令和2年12月1日現在、会員数は226名（うち、医師会会員が216名）。

6. 横浜市医師会等外部関係各種部会委員等推薦について

・横浜市産後うつ対策検討会委員

… 岩崎幹事

・横浜市小児慢性特定疾患対策協議会委員 … 相原会長

7. 令和3年度総会・研修会について

日時・会場：5月13日（木）19：00

ホテルプラム横浜 明治ファーマ

講演については令和2年度に中止とした演題・講師をそのままスライドさせて依頼する。開催方法は、web配信と来場を併用とする。

1. 野村伊知郎先生「消化管アレルギーガイドラインについて」仮題

2. 菅谷明則先生「ワクチンの最近の話題」仮題

8. 第48回横浜市産婦人科医会・小児科医会研究会（当番：横浜市産婦人科医会）について

日時・会場：6月11日（金）

産婦人科医会担当

今年度予定していた講演内容をそのままスライドさせる予定とのこと。

「子宮頸癌ワクチンについて」仮題

9. 来年度研修会について

耳鼻科医会との合同研修会は小児科医会の担当となる。

また、バイオジェンジャパンから脊髄性筋萎縮症（SMA）の講演会の依頼があったが、今年開催できなかったため来年の開催に向けて調整していく。（小児科医会単独研修会）

10. 医会ニュース第62号について

4月発行予定の医会ニュースについて、「時言」は岸常任幹事、「最近の話題」は松岡常任幹事、「病院紹介」は済生会横浜市東部病院の乾常任幹事が担当することとなった。

11. ヒトパピローマウイルス感染症に係る定期接種の対象者等への周知について

健康福祉局より医師会を通して周知依頼のあった標記の通知に対して、会員よりオーバーエイジの救済措置を求める意見があがったことが報告された。これを受け今後の対応について検討した結果、小児科医会としてはまず横浜市からの個別周知を要望し、その後救済措置の実施について提案していくという方向性が決定した。

12. 会員アンケート調査について

田口副会長より、今年度は「新型コロナウイルス感染症」について会員へアンケート調査を行うことになった旨の報告があり、アンケートの案が提示された。今後役員のメーリングリストを介して最終調整を行ったうえで調査を行い、来年4月発行の医会ニュースに調査結果を掲載する予定。今回はFAXに加え、インターネットによる回答も可とするように調整する。

13. その他

・乳幼児健診の講演必須化に向けて、阿座上副会長より講演会テーマおよび乳幼児健診講演内容の案について資料提供があった。

・相原会長より医会主催の講演会について、医師会の会議室からYouTubeによるライブ配信を行うことで製薬会社の協賛を受けない場合も費用をかけずに開催が可能となるのではないかと提案があった。その場合、小児科専門医の単位の発行方法が検討課題となる。

・12月5日（土）16時より崎陽軒6階にて横浜臨床医学会学術集談会が開催される。集談会終了後の懇親会は開催せず、当日の様子は後日、医師会ホームページより視聴可能となる予定。

2. コメント

1) 一昨年度から定期ワクチン接種・乳児健診受託について、研修の必須化の検討をしてきました。市医師会並びに横浜市の合意も得られ、実施に向けて検討中ですが、新型コロナの影響で開始が遅れています。こうした中でも、乳児健診の研修会とワクチン講演会を医師会と行政との共催で実施しました。今後さらに進めていきます。

2) 小児科医会から医師会を介して横浜市への要望を毎年提出しています。

今年度はワクチン接種の他市との乗り入れと任意接種の公費助成等について要望しました。来年度もさらに追加し、継続して要望を出していきます。要望の実現のためには、会員の数も重要です。ご理解とご協力をお願いします。

3) 今年度の医会主催の研修会はすべて中止としました。来年度からはハイブリッドで開催することとします。多くの先生方の参加をお願いします。

4) 耳鼻科医会との合同研修会第3回は小児科の担当で次年度秋に実施予定です。ご期待ください。小児科と耳鼻科は関わりも多く、耳鼻科の先生たちとの意見交換は意味のあることと考えます。

5) 産婦人科医会との合同研究会は今年度からは1回開催としています。

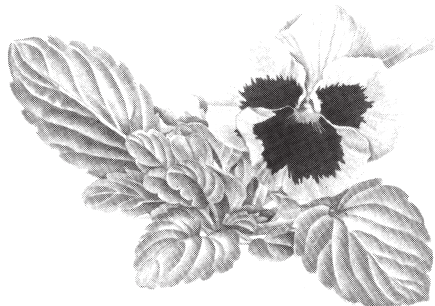
- 6) 眼科医会との合同研修会については必要に応じて開催したいと考えています。
- 7) 一昨年度から市内の主要な病院の小児科代表者の先生には医会の役員となっていただきました。市内における病診連携がさらに進むことを期待しています。さらに勤務医会員の数も増えることを期待しています。入会頂けていない代表者もおられます。声かけをしていきたいと考えています。
- 8) 今回会員のアンケート調査第2回目実施しました。コロナウイルスによる影響について調査を行いました。ネットからも回答できるようにしましたが、残念ながら回答率が思わしくありませんでした。今後もいろいろな調査研究などを企画していきたいと考えています。ご協力をお願いいたします。
- 9) 会員への通信手段にメールを活用しています。迅速性と経済性の観点からFAXなどよりも優れております。メール登録をお願いしてきております。まだお済みでない先生におかれましては是非ご登録をお願いいたします。

- 10) 一昨年度から市医師会学校医部会の特別委員会として市教育委員会と合同で成長曲線の活用について検討しています。長年懸案であったものですが、来年度からpilot studyを10校程度で開始予定です。小児科医会としても全面的に協力をしていきます。会員の皆様のご理解と御協力をお願い致します。

最後に

これまでも会員の皆様に何度もご依頼しているところですが、新規開業された先生や地区小児科医会には所属されていても市小児科医会に所属されていない先生もいらっしゃると思います。積極的に勧誘をお願いしたいと思います。医会から医師会を介して行政に申請や要望を出さなければ我々の思いは実現しません。会員数はそのための基礎となります。

宜しくをお願いいたします。



区会だより

南西部小児科医会

今季当医会では、新型コロナウイルス感染症の波が収まらぬ中、研修会等の集会は残念ながら全て見合わせました。今後、出来るだけ早い時期に再開したいと考えております。同感染症の流行状況によっては、オンラインを用いた会合も検討中です。皆様のご意見、ご指導をいただきたくよろしくお願い申し上げます。

(文責 小泉友喜彦)

南部小児科医会

横浜市南部小児科医会の令和2年度下半期の事業内容をご報告します。

●定例拡大幹事会

12月2日(水)

新型コロナ流行のため、中止

●第34回南部病院小児科地域連携集談会

2020年12月9日(木) 19:00~20:30

Zoomにて

共催: Meiji Seikaファルマ株式会社

①「非典型的な発作を呈した欠神発作の6歳、女児」 清宮 優香 先生

②「精巣上体炎の5か月、男児」 栗田 大輔 先生

③「繰り返す嘔吐で発症した食道裂孔ヘルニアの2か月、男児」 川田 愛子 先生

●横浜市南部小児科医会・金沢区小児科医会 新年合同研究会

新型コロナ流行のため、中止

(文責 竹田 弘)

青葉区小児科医会

令和2年度下半期の主な活動報告をいたします。金井良浩先生、栗嶋勇也先生を新たに迎え、会員数は現在31名です。

○青葉区医師会学術講演会(小児科医会合同)

オンラインで実施することを検討していましたが、新型コロナウイルス感染症(コロナ)対応で余裕がなかったため今年度は中止としました。

○青葉福祉保健センター主催の講演会

Zoomにて実施

・「これってアレルギー？」

～アレルギーの正しい知識を学ぼう～

10月20日 長濱隆明先生(長濱医院)

・「小児科医師による乳児期の親向け講座

～子どもの病気とその対応を中心に～

11月17日 齋藤陽先生(はるの木こどもクリニック)

○乳幼児健診などに関する青葉区役所こども 家庭支援課との懇談会

10月1日 Zoomにて実施

○小児科医会オンライン集会

9月23日, 1月27日 Zoomにて実施

令和3年2月からは、まめに開く予定

○救急注射薬の配布

ワクチン接種の副反応などに備えるために救急注射薬の常備が必要ですが、使用しないうちに期限が過ぎて箱ごと廃棄するケースが多いため、薬剤を購入して希望者に小分けのセットで配布しました。

○青葉区小児科医会だより(9月号, 10月号)

情報伝達や意見収集のため、メーリングリストの利用に加えて会報を発行しています。10月からは休日診療所の情報(患者数、コロナ対応など)を共有しました。

(文責 松岡 誠治)

東部小児科医会

＝ 庶 務 報 告 ＝

令和2年度後半の主な活動を報告します。

(1) 令和2年12月10日

第14回横浜市東部小児連携の会

第117回横浜市東部小児科医会

(共催 横浜市東部小児科医会・鶴見区医師会・済生会横浜市東部病院・東亜新薬株式会社)

済生会横浜市東部病院 症例検討会

演題1：トラニラストによりStevens-Johnson症候群と胆管消失症候群を生じた薬剤性肝障害

演者：済生会横浜市東部病院小児科
藤井まどか 先生

演題2：多飲・多尿を契機に診断に至った下垂体部・松果体部germinomaの一例

演者：済生会横浜市東部病院小児科
山本 崇 先生

演題3：COVID-19流行期のネブライザーの使用について当科での試み

演者：済生会横浜市東部病院小児科
今野 裕章 先生

特別講演：『子供の腸内細菌叢と疾患』

演者：済生会横浜市東部病院小児肝臓消化器科副部長 十河 剛 先生

会場：済生会横浜市東部病院（Zoomオンライン講演会）

COVID-19感染予防に配慮して、初めて「Zoomによるオンライン講演会」形式で開催致しました。

若干の通信トラブルはあったものの、多くの会員の参加を得て、盛況のうちに無事、会を終えることができました。

次回の開催もZoomでの開催を予定しております。

(文責 川端 清)

1. 令和2年度研修会→中止

新型コロナウイルス感染拡大のため開催を見送った。

2. 常任幹事会

第3回 R2.12.2 (水)

於 横浜ベイシェラトンホテル&タワーズ

出席者：10名

3. 役員会

R3.3.24 (水)

於 横浜ベイシェラトンホテル&タワーズ

出席者：15名

4. 広報活動

R2.11.1 (日)

小児科医会ニュース（第61号）の発行

5. 表彰

横浜市長表彰（母子保健事業功労）受賞

相原 雄幸 先生

横浜市医師会学術功労者表彰受賞

小泉友喜彦 先生

6. その他

*第28回横浜臨床医学会学術集談会

R2.12.5 (土)

会場：崎陽軒本店6F

小児科医会演題：小児新型コロナウイルス感染症の特徴と横浜市の小児医療体制

小児科医会演者：

西村 謙一 先生

(横浜市立大学 発生育成小児医療学)

*会員アンケート調査の実施

テーマ：新型コロナウイルス感染症について
回答率：40.7%

(文責 阿座上志郎)

＝ 会計報告(中間) ＝

横浜市小児科医会会計の中間報告を申し上げます。

中間報告 R03. 03. 31現在

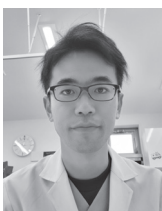
現在高	2,505,252円
(内訳) 現金	0円
郵便貯金	434,688円
医師信用組合	2,070,564円

(会計 池部 敏市)

会 員 動 向 (令和2年10月～令和3年3月)

入 会 1 名

〒227-0043
青葉区藤が丘2-6-9 2F
(医) 藤の会かない小児科 TEL 045-509-1640
金 井 良 浩



一般診療、予防接種などに加え、
けがや、予防など、地域医療に
貢献していきます。ご指導ご鞭
撻のほどよろしくお願い申し上げます。

編集後記

お忙しい中、小児科医会ニュースにご寄稿頂きました先生方、ありがとうございました。

医療従事者や高齢者の新型コロナウイルスワクチン接種が始まりましたが、第4波に入りつつあり、心配な日々が続きます。

先日、内科健診のために小学校を訪れた際、校庭で楽しそうに遊ぶ子ども達の姿に、こちらが元気をもらいました。昨年の春は休校だったことを思うと、withコロナの新しい生活様式ではありますが、学校生活が再開されたことを嬉しく思います。

この1年間、環境の大きな変化で心身のバランスを崩してしまったお子さんも多いように感じます。日常診療や健診の場で、子ども達の変化を敏感にとらえ、手助けできたらと思います。そして、子ども達が活き活きと過ごす手助けができれば嬉しいです。

(広報担当理事 中島 章子)

退 会 6 名

区 名	氏 名	備 考
川 崎 市	佐 野 守 男	
旭 区	斉 藤 明 子	
鶴 見 区	雪 吹 周 秀	
神奈川区	大 西 三 郎	
旭 区	小 島 正	
栄 区	岡 野 俊 兼	R2. 8. 12 ご逝去

会員数：222名(令和3年3月31日現在)

2021年5月1日発行

横浜市小児科医会ニュース No. 62

題字 五十嵐鐵馬

発行人 横浜市小児科医会

代表 相原 雄幸

編 集：横浜市小児科医会広報部

事務局：〒231-0062

横浜市中区桜木町1-1

横浜市医師会 地域医療課

Tel 201-7363